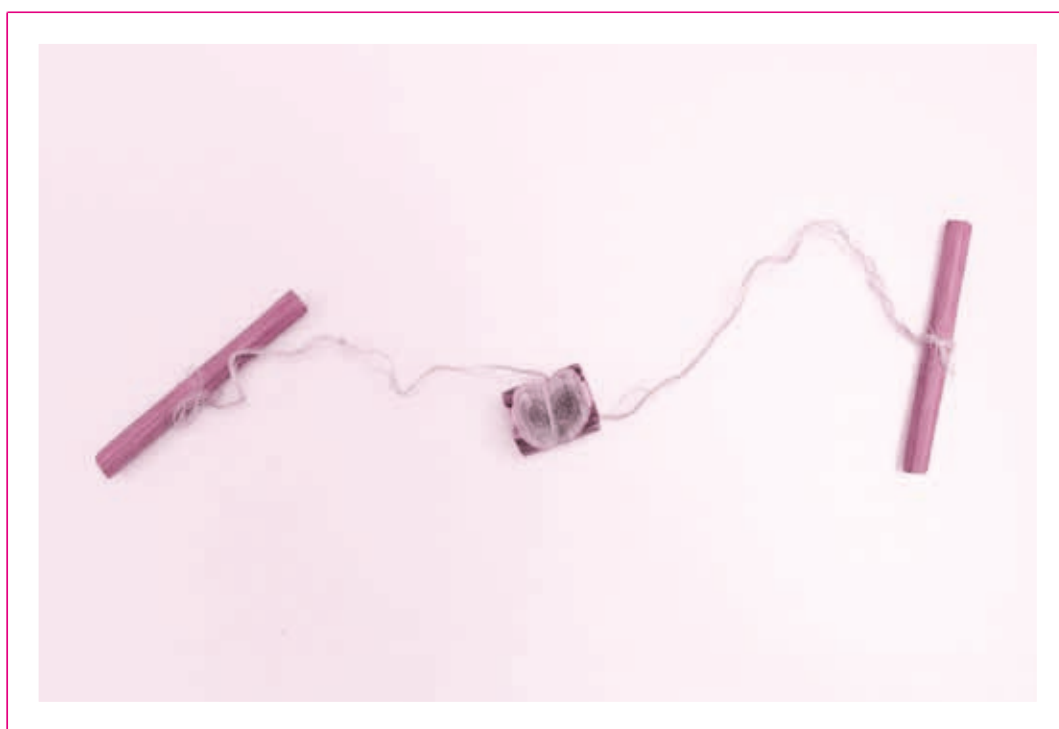




北方民族博物館だより

No.113



D30.18 玩具〈ぶんぶんゴマ〉

エスキモー（イヌピアック）アラスカ／アナクトブックパス 31.0 x 2.0 x 1.5cm
 ジャック・アギューク氏製作、岡田宏明氏収集（1962年）、岡田淳子氏寄贈（2018年）

トナカイ角と臍で作られたぶんぶんゴマである。臍の紐を数回ねじり、左右の棒を外側に軽くひっぱることで、中央のコマを回転させて遊ぶ。1962年、岡正雄氏（明治大学教授）率いるアラスカ調査チームに参加した岡田宏明氏（当館2代目館長）が収集したものである。2018年になって岡田淳子氏（当館4代目館長）より寄贈された。

収集当時、岡田夫妻の間に子供が生まれると知り、宏明氏と親交の深かったアギューク氏が子供用に作り、贈ってくれたものだという。日本の最初期のアラスカ民族調査の一コマを伝える資料である。

目次 Contents

- 1 表紙 ぶんぶんゴマ
- 2 講座「凍土の融けゆく大地」
／講座「ビーバーマンの物語」
- 3 館長講座「異なるコトバが出会うとき：国際先住民言語年に寄せて」
／巡回展「ヤヨペヨペ 国立アイヌ民族博物館PR展」
- 4 INFORMATION

講座

凍土の融けゆく大地

2019.2.17

講師：飯島 慈裕氏（三重大学准教授）



講師の飯島氏

企画展「融ける大地—温暖化するシベリア・中央ヤクーチア」の関連事業として、地球温暖化による東シベリアの環境変化と社会に対する影響に関する講座を行いました。講師は、永久凍土と森林生態系、気候変動との相互作用に関する研究を行っている自然地理学者です。以下に講座の概要を紹介します。

* * *

寒冷地域のなかで、東シベリアには特に永久凍土（一年中凍った状態の土や岩）が多く分布しています。夏には地表部分が融けますが、地下には永久凍土があり、そのなかに氷の塊がたくさん含まれた「エドマ層」と呼ばれる地層があります。何らかの原因で土壌の融解がエドマ層にまで達すると、そこに含まれる氷が融けて流れ出します。その結果、地面が陥没するなどしてできた地形をサーモカルストと呼びます。

一般的なサーモカルストは、数千年をかけて徐々に形成されてきたと考えられています。しかし東シベリアでは、1990年代以降、新しいサーモカルストが急速に発達し始めました。おそらくその原因は、温暖化や湿潤化といった気候変動やソ連崩壊に伴う無計画な土地利用と考えられます。特に問題になっているのは、宅地として開発した場所で、住宅などを建てた後に土地が陥没するケースです。

こうした問題に対し、近年、研究分野も国籍も多種多様な研究者が集まり、永久凍土環境の変化や現地住民の認識などに関する共同研究をおこなっています。これらの研究により、多角的な視点から、永久凍土融解の社会への影響を明らかにすることが期待されています。

* * *

本講座には27名の参加者がありました。現地調査を基にした講師のお話に、大いに知識を深めた様子でした。

(学芸グループ 中田 篤)

講座

ビーバーマンの物語

2019.3.23

講師：野口 泰弥（当館学芸員）

アラスカやカナダ・ユーコン準州の北方アサバスカンには、人間を食べる巨大な動物たちを、世界中を旅しながら退治し、人間に安全な世界をもたらした英雄の神話が広がっています。特にユーコン準州の人々は、彼のことを「ビーバーマン」や「賢いビーバー」などと呼んでいます。彼は人間でもビーバーでもある、その両方である者として語られます。本講座ではこのビーバーマンの物語と、そうした物語を表現する北トウショウニの彫刻文化について紹介しました。

特に多くの地域に広がっているエピソードとして、人食いクズリの話があります。昔、クズリは滑りやすい山の斜面の下に、槍を設置して人間を捕らえていたといわれています。ビーバーマンはこの罠にかかったふりをします。クズリはビーバーマンを見つけると、よい食料が手に入ったと喜んで、彼を家に持って行きます。家ではクズリの家族がお腹をすかせて待っていました。ビーバーマンは機転を利かせて、クズリたちを殺しますが、子クズリたちは木に登って逃げます。ビーバーマンは子クズリたちを殺そうとしますが、彼らは様々な力を使って、ビーバーマンを撃退します。結局、ビーバーマンは子クズリを殺すことを諦め、彼らが今後食べるべき食料を渡し、人間を食べることを禁止します。

人間を食べる怪物退治の物語は、北方アサバスカンと共通の先祖を持つと考えられている、南方のナバホやアパッチにも伝わっています。ナバホの物語の中には、例えば、天候を変えながら登場する人食いワシといった、ビーバーマンの物語と共通するモチーフもあるようです。



野口泰弥

南トウショウニの神話では、ビーバーマンは「人間のような男」と出会った際、人間の食べ物を与え、それを食べるかどうかで彼が人間であるのかを見極めようとしています。人間と同じ言葉を話し、同じ道具を使い、同じ文化を持ち、時には同じような見た目をしている動物たちは、「人間とは何か」という問題を投げかけているように思います。一部の神話は、「何を食べるか」という基準により、人間という存在を規定しようとしているように思われます。

(学芸グループ 野口 泰弥)

館長講座

異なるコトバが出会うとき： 国際先住民言語年に寄せて

2019. 4.28

講師：津曲 敏郎（当館館長）

今年は、国際先住民言語年にあたります。世界には現在、少なくとも5000の先住民が存在し、2680の先住民言語が消滅の危機にあります。ユネスコ（国連教育科学文化機関）によれば、先住民言語は2週間に1つの割合で消滅しているといえます。国連は、国際先住民言語年プロジェクトを、消滅危機言語の保護につなげようとしているのです。

今回の館長講座では、この国際先住民言語年に寄せて、漂流民や探検家が未知の土地で異なる文化をもつ人びとに出会ったとき、どのようなことが起きたのか、言語を軸に解説されました。大黒屋光太夫の漂着とその後の道のり、間宮林蔵の北方探検、松浦武四郎の蝦夷地・樺太調査、そしてアルセーニエフのロシア・沿海地方探検のエピソードなどが紹介されました。

光太夫、林蔵、武四郎は出会った人々の記録を詳しく残しました。これらの記録は、その時代の先住民を知る上で参考になります。アルセーニエフの著書『デルスー・ウザーラ』について調べてみると、著者の創作と思われる点もうかがいあがります。事実に加えて、作られた先住民像も語られていると考えられます。



講座の様子

かつて調査地で、「私は頭が痛い」に当たる言い方を尋ねたところ、薬を差し出されたことがあるそうです。コトバを語るためのコトバ（メタ言語）が現実世界と混同された一例です。

現代の言語学・人類学のフィールドワークのあり方には従来に比べ変化がみられます。被調査者の文化への理解と尊重、現地コミュニティとの協力・成果還元が重視されるようになりました。先住民言語は先住民にとって必要十分な語彙と独自の構造をもっており、無理にヨーロッパ諸言語の枠に当てはめるのは誤りであるというのが近・現代言語学の基本的な立場です。

（学芸グループ 種石 悠）

巡回展

ヤヨペヨペ 国立アイヌ民族博物館PR展

2019.4.27 - 5.12



会場の様子

現在北海道白老町に建設中の国立アイヌ民族博物館の開館をPRする「ヤヨペヨペ 国立アイヌ民族博物館PR展示」を国立アイヌ民族博物館設立準備室との共催で開催しました。

白老町のポロト湖南岸に、アイヌ文化の復興・発展のための拠点となる、民族共生象徴空間（愛称ウポポイ）が整備され、令和2年（2020年）4月24日にオープンします。国立アイヌ民族博物館は、このウポポイのなかに建設され、アイヌの歴史や文化などに関する幅広い理解の促進を図り、アイヌ文化の発展と創造の核となることを目指しています。

約1300平米の基本展示室は、「導入展示」、それぞれの展示テーマを代表する資料を一望できる「プラザ展示」、6つのテーマコーナーから構成されます。またアイヌ文化を楽しみながら学べる「子ども展示」も設けられます。

6つのテーマコーナーは「私たちのことば」「私たちの世界（信仰）」「私たちの暮らし」「私たちの歴史」「私たちのしごと」「私たちの交流」というように、アイヌの視点から「私たちの」という語りで始まっていることが特徴です。

国立アイヌ民族博物館では室名や解説文をアイヌ語で表示するため、アイヌ語の検討委員会も設けられています。

PR展ではパネルとPR映像、展示のために収集した資料のスライドを紹介しました。順調に進んでいる工事写真等をご覧になった方からは、開館してみたらぜひ行ってみたいという声がかかれました。

展示にあわせて、国立アイヌ民族博物館設立準備室の霜村紀子主任研究員による講座『アイヌ絵入門』を行いました。現在22名の学芸職員が、札幌と白老の二箇所でも精力的に開館準備をすすめています。

この展示会は、当館のあと道内を中心に、道外にも巡回する予定です。

なおヤヨペヨペはアイヌ語で「自己紹介」を意味します。

（学芸グループ 笹倉 いる美）

北海道立北方民族博物館第34回特別展

『北欧サミの暮らしと工芸』

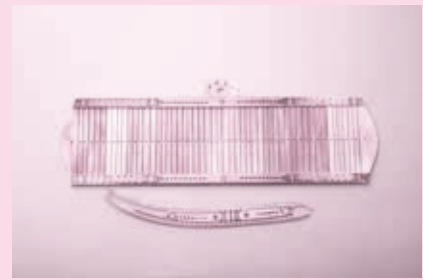
会期 令和元年（2019年）7月13日（土）から10月14日（月・祝）

会場 北海道立北方民族博物館特別展示室

観覧料 有料

主催 北海道立北方民族博物館

協力 明知直子氏、田辺陽子氏、結城伸子氏



織り具

北欧に暮らすサミの文化について、特に工芸品を中心に歴史的な経緯をふまえながら紹介し、さらに文化復興／保持の取組にもふれます。

主な展示資料 衣服、トナカイ櫛、白樺こぶ細工など

関連事業

7月14日（日）10:00-10:30 解説会「特別展展示解説会」講師：笹倉いる美（当館学芸主幹）

7月20日（土）9:30-12:30 講習会「ローヴィッカヤーンで編むポットホルダー」講師：結城伸子（造形作家）

7月21日（日）9:30-12:00 講習会「錫糸プレスレット作り」講師：結城伸子（造形作家）

9月15日（日）10:00-11:30 講座「サミと言語文化復興への取組み」講師：田辺陽子（ロンドン大学教育研究所博士後期課程）

9月21日（土）13:30-15:00 講演会「サミの文化と工芸」講師：エリカ・ノルドヴァル・ファルク（サミ民族学者）

9月22日（日）10:00-12:30 講習会「サミの手袋」講師：エリカ・ノルドヴァル・ファルク（サミ民族学者）



革袋

INFORMATION

行事報告

◆3月8日（金）、9日（土）講習会「とんぼ玉作り」（講師：笹倉いる美学芸主幹）を開催しました。



とんぼ玉を作る参加者

◆3月10日（日）講習会「ウイльта刺繍の財布作り」（講師：フレップ会）を実施しました。



刺繍をおしえる

◆3月16日（土）はくぶつかんクラブ「ロシア風ぎょうざ『ペリメニ』づくり」（講師：中田篤主任学芸員）を実施しました



美味しくできたかな？

◆4月20日（土）はくぶつかんクラブ「カラフルまが玉づくり」（講師：若山恵子解説員）を開催しました。

◆5月3日（金・祝）～5日（日・祝）ゴールデンウィークイベントとして「ころころフェルトボールのストラップづくり」「ビーズ付き革のコンパクトミラーづくり」「粘土でつくる北のキーホルダー」を開催しました。



完成した作品を手にする参加者

◆5月25日（土）上映会「北方民族博物館シアター 春」を開催しました。

◆5月26日（日）施設見学会「道立オホーツク公園・北方民族博物館施設見学会」（案内：中田篤主任学芸員）を実施しました。

◆6月1日（土）はくぶつかんクラブ「動物ししゅうのクリアファイル」（講師：石原生久代解説員）を実施しました。

職員の異動

[退職]（平成31年3月31日任期満了）
南出 正人（学芸グループ）

北方民族博物館だより No.113

令和元年（2019年）6月21日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会